

---

bewilderment

夜光虫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

bewilderment

### 【Nコード】

N3122Z

### 【作者名】

夜光虫

### 【あらすじ】

四大貴族で北の大地を任されている『アルテミス家』。この地は年中真冬の様で、大地の実りは極僅かだ。今年の収穫は特に少ない。家族10人+その他大勢の領の民、このままでは皆飢え死に．．．！そこで、立ち上がったのは両親・他の兄妹たちに似ても似つかない次期当主、「ネスカ・ルナ・アルテミス」。無口な彼が提案したのは、帝都で毎年行われる騎士入団試験へ自分が出場することだった。

## 異分子 1 (前書き)

宜しく願います。

## 異分子 1

四大貴族の一家で北の大地を任されている『アルテミス家』。

四大貴族とはその昔、この国を平和に導いたとされる『アテーナー』  
『アポローン』 『アレース』 『アルテミス』 四人の神々たちに、それぞれその名を与えられた貴族のことだ。

そして四大貴族は、名を与えられた神を己の守護神に迎え、それぞれにその神の名に相応しく秀でていた。

例えるならば、アルテミス家『アルテミス』は弓術・森林・狩猟・純潔の神、また、処女神だが豊穡の神であるので弓術や狩猟、農業はお手の物だ。

だが、アルテミス家の治めるこの北の大地は年中真冬の様で、大地の実りは極僅かだ。

さすがに偉大なる神々の名も、自然の理には敵わないらしい。

しかし、四大貴族といえど僅かな大地の恵みを独り占めにするわけにはいかない。

自分たちが生きるのに糧を必要とするように、この領地の民、動物たちその他の種族たちも同様に糧を必要とするのだ。

傲慢な貴族であるはずなのに、そんな希少な考え方を持つ領主、また、その家族であったから領民にはもちろんとても慕われていた。

また、他の大地の領地では絶えない他種族との争いも、柔軟な考えのアルテミス家の治めるこの地では、ほとんど無いと言っても過言ではなかった。

だが、領民や他種族にはすこぶる評判が良いこの地の領主であり、アルテミス家の現当主でもある「ライシス・イル・アルテミス」は、ほかの貴族には評判があまりよろしくなかった。

はつきり言ってしまうえば、変人扱いだ。

それもそのはず、領民には受けがいいこの考え方はお高く留まった帝都の貴族にとっては、鼻に付くことでしかない。

そうして、煩い貴族たちの意見に飽き飽きした王が渋々といった風に、この厳しい北の大地をアルテミス家に治めることを命じたのだ。それは彼、ライシス一人だけではなく彼の先祖代々からの考えで、仕方のないことなのだが、今回はかりは先祖に溜息を吐かづにはいられない。

これまではなんとか家族10人+その他大勢の領の民たちで、協力しながら切り盛りしてきたが　今年の収穫は特に少なすぎる。

ただえさえ寒いこの地、本格的に吹雪を吹き始めるこの時期に蓄えが少ないのは深い痛手だ。

ライシスは頭を抱え、今日で何回目になるかも分からない溜息を吐いた。

妻であるティアナが淹れてくれた紅茶は苦惱しているうちにすでに

冷め切っていて、ふと外を見てみると日はすでに傾いていた。

そろそろ、夕食の時間だな。

お腹を空かせた愛しい子供たちは、我先にとすでに席についているかもしれない。

賑やかな食卓を想うと自然と頬が緩んでしまう。

ライシスはゆっくりとした動作で立ち上がり、先程の重い気分を掻き消すかのように、軽い足取りで家族の待つ暖かい場所へ向かった。

## 異分子 1 (後書き)

ローマ神話、ギリシャ神話参考にさせて頂きました。

また、オリジナルの部分もあります。

困惑、混同してしまった方、本当にすみません。

## 異分子 2 (前書き)

宜しく願います。



## 異分子 2

毎日の楽しみの一つである、妻とのささやかな食後の晩酌。

家族との暖かい食後の後に、ほろ酔いで妻と他愛もない会話を交わす．．．それだけで、一日の疲れも吹き飛んでしまう。

幸せなゆつくりとした時間を過ごしていると、最近己を悩ませている頭の痛いことは今この時だけでも忘れてしまいそうになる。

ささやかながらも穏やかに幸せな（精神的に）、夢のような心地よい時間が流れていた。

だが、現実はそう甘くなかった。

その突然の来訪者は、いたって普段通りに現れて淡々と言った。

8

「お寛ぎのところすみません。夕食での件についてですが、かなり深刻なものとお見受けしました。これは自分の勝手な解釈ですが、ご提案いたします。」

控えめなノックで、ゆつくりと開け放たれたドアとは裏腹に閉まると同時に、放たれた言葉の嵐。

息継ぎもせずただただ普段通りに無表情、かつ機械的に言い放ったのは、次男であり次期当主でもある「ネスカ・ルナ・アルテミス」。

まだ少年の面影を残す普段無口な彼は、稀にみる饒舌で、現当主である父親を現実に取り戻すかのように。

また、傷をえぐるかのようにストレートに、己の見た真実だけを付いてきて…カツカツと父親に歩み寄ると一枚の紙を手渡した。

「お二人もご存じのとおり近々、帝都で毎年行われるという騎士入団試験があります。この試験は少し変わった形式で開催されるので、自分はこれに参加いたします。資料はもうすでに提出してあるのでお気になさらないください。では、夜分遅くに失礼しました。良い夢を。」

と、爆弾発言を残し、優雅にお辞儀してみせると何事もなかったかのように部屋を出て行った。

ライシスは嵐のように来て嵐のように去った、息子に呆然とするこ  
としかできなかった。

「まあ、大変なことになったわねえ。」

妻であるティアナの呑気な言葉が聞こえた。

なんでこんなことになっているのだろう。

考えても考えても何も分からず、ただ息子の言葉が頭の中を掛けづ  
り周るだけ。

息子は「夕食での件についてですが、かなり深刻なものとお見受け  
しました。」と言っていた。

そんなに自分は分かりやすかっただろうか？子供たちの表情はどの  
ようなものだったか？

記憶は数十分前に遡っていた。

あの後、ライシスが予想したとおりに子供たちはすでに席についていて、ライシスが部屋に来たのを見るなり途端に目を輝かせた。

妻のティアナは席を外そうとしていたようで、ライシスが部屋に入ってきたのを確認すると柔らかく微笑んだ。

「まあ、今から貴方を呼びに行こうかしらと思っていたところなのでも、ちょうどよかったわ。」

そのまま席を立つとライシスの椅子を軽く引き、席に着くことを促した。

「ありがとう。」

ライシスも軽く微笑みを返して、ゆっくりと席に着いた。

長男のラファエルは母親であるティアナに似て、柔らかく微笑んでいる。

次男のネスカは微動だにせず、ただ綺麗な姿勢で待っている。

三男の最近ライシスの背を越した成長期のラフォートは、少し遅れた反抗期も迎えた。

そのせいもあって、先程から言い争っている長女のティファリーナと次女のラフィーナに苛々しているようだ。

6番目と7番目の一卵性双生児のよく似た兄弟は、もう我慢ができないようでそわそわし始めている。

8番目の赤ん坊はすでにティアナに食べさせてもらっているのだから、それも双子の空腹に拍車をかけているのだろう。

ライシスはいっ見ても飽きない子供たちにくすつと微笑し、軽く子供たちに詫びを入れてから両手を祈りの形に組み合わせた。

「守護神アルテミスに感謝を。」

そう言って、目を瞑る。

すると、先程までざわついていた子供たちも静かに祈りを捧げ、食卓は束の間しんと静まり返る。

…ライシスが目を開けるとすでに皆、目を開けていて待ちきれず、フォークに手を伸ばしている子もいた。

どうやら自分が最後だったらしい。

子供たちの食欲には恐れ入ると思いながらも、笑みが零れるのを我慢できずにくくつと笑うと「さあ、食べようか。」と言った。

それからの料理の減りは凄まじかった。

贅沢をするわけにはいかないので、料理はどれも質素なものばかりだ。

だが、気のいい料理長が腕によりをかけて作った料理は暖かく、素朴な美味しさがあった。

あつという間になくなった料理に、数少ない使用人たちも微笑みを交わしながら片づけて行った。

いつもならここでお開きになり、皆それぞれで自由に動き出すのだが、今夜は違った。

ライシスは、子供たちに大広間に向かうように言った。

使用人も料理人も大広間に集められ、これから何が始まるんだとざわめき立つ。

しかし、遅れてライシスが登場すると、騒いでいた使用人たちもさすがに口を結んだ。

ライシスは、端正な顔にいつものような温和な笑みを浮かべ、ゆっくりと皆の前に立った。

そのいつも通りの笑みにほっと胸をなでおろす者もいた。

だが、古株の者はまだ安心はできないとでもいう風に顔を曇らせ、ライシスの言葉を待っていた。

ライシスがゆっくりと口を開く。

「今年の収穫が特に少ないことは、みんな知っている通りだね。そこで、帝都の方に使いを送ってみることにしたよ。皇帝様はきつといい返事を下さるだろう。…ここまで、私の独断で行ったんだ。一応、報告だけしておこうと思ってるね。さあ、手間を取らせてすまなかったね。みんな、自分の持ち場に帰ってくれていいよ。」

ライシスの報告が終わると、使用人たちはすっかり肩の荷が下りたとでもいう風に、晴れ渡った笑顔を見せた。

みんな何も言わないが気にしていた者も沢山いたのだろう。

すっかり気を使わせていたらしい。

ライシスは苦笑し、最後に我子たちの方を見た。

小さい子供たちも気にしていたらしく、さっきまで不安な顔をしていたがもう騒ぎ出し始めている。

年長の子供たちは、ほっとしていたり穏やかに笑っていたり反応はいろいろだ。

その中で次男のネスカの様子が少し気になったが、彼はいつも通りの無表情だったので、すぐにその違和感も頭の端に追いやられたのだった。

そして、冒頭に戻る。

あの時は、みんなの不安を取り除けたことで安心しきっていた。

ああ、あの子はこういう突拍子もないことをする子だった。

よくよく考えれば、分からなくもなかった。

だが、今となっては後の祭りだ。

今度は、自分自身に溜息をつかざるを得なかった。

## 異分子 2 (後書き)

ネスカはこうい子です。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3122z/>

---

bewilderment

2011年12月11日14時55分発行